かったるい症候群を読み解く
現代型うつ病予備軍「滅公奉私」な人々

著　牟田武生

「生きる力」が求める学習者には、「自ら学ぶ」といった能動的な姿勢が含まれている。その対極にあるのが「めんどくさい」「かったるい」を連発する子どもたちだ。思春期特有の社会や大人に対する反発的な姿勢であれば、問題はそれほど大きくないのかもしれない。

著者は「すべてがめんどくさいですけど、それが何か？」という態度で学校生活や社会生活を送っている子どもたちや若者たちが問題と指摘し、その問題性を読み解いていく。物事に内向きであり、マイペースで自己中心的な考え方・ものの見方をする〝消極的自己チュー症候群〟が問題なのだ。

このような「めんどくさい・かったるい症候群」の子どもや若者たちを、年齢や社会に応じた役割と責任ある仕事をさせようとすると、心が幼いために、直接的な叱咤激励では動かず、そのような叱咤激励を続ければ、うつ病的な症状が見られるようになるという。ただし、本人は直面する課題に向き合い、悩んでいるのではないため、本当のうつ病ではない。「うつ病と似た症状や状態が見られる」のだ。

今の日本の若者が内向き志向なのも、この症状が若者全般に見られるからかもしれない。

このような若者の現状にもかかわらず、身に付いていない「コミュニケーション能力」や「社会リテラシー能力」が求められる時代になった。これらの能力を身につけるには、乳幼児期の昔ながらの子育て、児童期に先回りしない大人の教育姿勢、そして、社会全体で私事化優先を見つめ直し、人々の絆を深め、同症候群のように問題を抱えるの子どもや若者とともに生きていくソーシャル・インクルージョンを推進していくことが求められる。

本書は、初任の教員理解・育成の参考にもなる。

ワニブックス／840円